

ただいま、国立ガンジー博物館と東洋哲学研究所との間で、交流協定を結んでまいりました。今回のシンポジウムは、この協定にもとづく最初の学術交流であります。その意味において、「ガンジー主義と仏教」は、人類文明史の大いなる転換期に、インドと日本の学術機関がそれぞれの知見を深めあい、未来への「精神的指標」を創造するにふさわしいテーマであります。

ガンジーも、仏教の創始者・釈尊も、ともに悠久な「精神の大国」インドの精神的・文化的土壌から出現した「巨人」であります。そして今日、ともに「暴

力と戦争の世紀」をこえて、「非暴力と平和の世紀」を開かんとして苦闘する世界を導く、「人類の教師」の使命を果たそうとしております。

東洋哲学研究所は、一九六一年、池田SGI会長が、釈尊成道の地・ブッダガヤに立たれて、数千年に及ぶ文明史の「暴力と憎悪の連鎖」という「宿命」を転換するために、仏教の「慈悲」と「智慧」の哲理を、東洋から世界へと広めゆく拠点として構想され、翌一九六二年に設立された研究所であります。

周知のように釈尊は、成道の後ベナレスにおもむき、

かつての修行仲間に「初転法輪」を行い、次いで六十人の青年を弟子としてから、本格的な伝道に入っていきます。そして、ウルヴェーラにおいて三人の修行者とその弟子・千人を教化して、当時、最大の大国であったマカダの都・王舎城に向かう途中、ガヤシーサにのぼり有名な説法を行っております。

ガヤシーサの小高い丘の上ののぼり、都の火を眼下に望みながら、釈尊は「弟子等よ、総ては燃えている」と説きはじめます。「弟子等よ、何の火によって燃えるか。貪欲の火、嗔恚の火、愚痴の火によって燃えている。生と老と病と死と、憂、悲、苦、悩、悶の火によって燃えている」と。煩惱の火が人間世界に燃えさかっている、貪欲、嗔恚、愚痴の三毒の焰が、生老病死や憂悲の苦悩をひきおこし、人間の根源的苦悩をつくり出していると説くのであります。

この説法は、後代『法華経』の編者によって「三車火宅の譬」となって結晶しております。『法華経』(譬喩品)には、「是の諸の衆生、まだ生老病死、憂悲苦悩を免れずして、而も三界の火宅の為に焼かる」とありま

す。三毒をはじめ煩惱の炎が、個人の生命の内奥から激発されて、家族、民族、国家、そして人類から生態系へと広がっていく様相を、釈尊の炯眼が洞察していたのであります。

二十一世紀の初頭、セブテンバー・イレブンのアメリカでの同時多発テロは、まさに、長足の進歩をとげた現代物質文明が、その暴力性、貪欲性の故に「三界火宅」の様相を呈した惨事でありました。「三界の火宅」は、アフガニスタンからイラクへと連鎖し、パレスチナをはじめ、地球上の各所で、煩惱の炎が紛争、テロとなって噴出してあります。

池田SGI会長は、セブテンバー・イレブンの直後、「我々が打ち勝たねばならぬ悪」と題する一文を発表しました。そのなかで会長は、セブテンバー・イレブンの本質を、「文明的な課題として捉えよ」と主張しております。

人類は長きにわたって、憎しみが新たな憎しみを生み、報復が新たな報復を招く、憎悪の連鎖

の歴史を繰り返してきた。(中略)「憎悪」や「破壊」は人々の社会を分断する悪のエネルギーだが、それとは正反対の「慈悲」や「創造」の生命も、これらと同じく、どの人間の生命にも内在している。そのことを互いに自覚し、目に見えぬ「生命の絆」に結ばれた人類として、分断から統合へ、破壊から創造へと時代のベクトルを大きく変える時が来ている。軍事力などのハード・パワーによる解決は、その本質的な問題解決にはつながらないであろう。

(「灰の中から」より)

憎悪や暴力性、貪欲性に打ち勝つ善性の開発、すなわち、慈悲と非暴力、自己コントロールの力の強化へと「時代のベクトル」を変換する道を示されているのです。その道は、釈尊とガンジーの照らし出す「精神力の強化」、エンパワーメントと同主旨であります。すでにガンジーは、二十世紀の初頭に、「剣の教義」のなかで、暴力性に打ち勝つ非暴力、精神力の力を説

しております。

わたしは夢想家ではない。わたしは実際のな理想主義者であると自認している。(中略)暴力が獣類の法であるように、非暴力は人類の法である。獣類にあつては精神は眠っており、獣類は肉体の他には法を知らない。人間の尊厳は、より高い法に、すなわち精神力の力に従うことを要求する。

(「ヤング・インディア」、一九二〇年八月十一日)

二十一世紀、すなわち第三の千年へと突入した人類文明史は、核、テロ、紛争、極度の貧困、人権抑圧、性・宗教・民族差別、生態系破壊等の地球的課題から、その基盤をなす人類心そのものの衰弱と分裂、貪欲と化した欲望と暴力性、自己中心性の激発をひきおこしております。

したがって、現代における「暴力」は、ヨハン・ガルトウングの分類にしたがえば、「直接的暴力」から深

くその基盤をなす「構造的暴力」「文化的暴力」のすべてのレベルに及んでおります。また、その範囲も、個人の心のなから、家族、民族、国家、人類にまで拡大し、それぞれの領域での「暴力性」「煩惱性」を発現しております。

文明史のベクトルを「暴力と戦争」から「非暴力と平和」へ、「悪性の激発」から「善性の開拓」へと転換しゆくためには、これらすべての領域とレベルでのたえまない努力が要請されましょう。

個の生命のみならず、人類が生態系とともに生きのび、持続可能な繁栄をするには、ガンジーや釈尊のさし示す「非暴力と共生」の道を、営々と開拓していく以外にはありません。

本日のシンポジウムが、「暴力性」「煩惱」に打ち勝ち、「非暴力」「善性」開発のための智慧と実践への示唆を与える内容になることを期待しております。

(かわだ よういち／東洋哲学研究所所長)